

水車による石粉・陶土粉碎機 — トロンメル —

■山間の川辺に建つ白っぽい不思議な工場

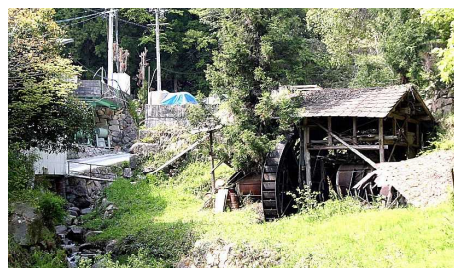
瑞浪市^{みずなみ}の山間の川辺を通ると、工場建物や周辺が白っぽくなった不思議な光景に出会う。加えてガラガラと聞き慣れない音も響いてくる。鉄製の大きなドラムがゆっくりと回転し、水車も回っている。そこはトロンメルという機械を用いて陶磁器用の石粉や陶土、釉薬^{いしこ とつち まさ}などの原料をつくる工場である。川沿いには、かつて300を超える水車やトロンメルが回っていたという。しかし今、水車が回る姿は見られない。



当時稼働中の水車動力のトロンメル
(瑞浪市釜土町神徳川沿い、2001.11 筆者撮影)

■陶土、釉薬の原料づくりに欠かせない機械設備

愛知県の尾張地方から岐阜県^{とうのつ}の東濃地方にかけては全国的にも知られた陶磁器産地である。豊田市の藤岡地区^{きなげ}や猿投地区の山間の川沿いにも沢山のトロンメル(この地区ではトロミルと呼ぶ)が回り、瀬戸方面に陶土原料などを出荷していた。当初は杵搗きであったが大正時代にトロンメルが導入され、生産量が伸びた。しかし藤岡、猿投地区では昭和30年代に終焉する。



山間の川沿いに残っていたトロンメル小屋
と水車 (豊田市大岩町、2004.4 筆者撮影)



トロンメルで粉碎した陶土の乾燥棚
(瑞浪市釜土町の佐々木川沿い、2001.11 筆者撮影)

トロンメルの容量は600~1000kgが広く使われ、内部は厚さ10cmほどの

高硬度^{けいせき}の珪石が敷き詰められている。そこに径10cmほどの玉石と原料のサバ土(真砂)と水を入れて、2昼夜ほど掛けてゆっくり回転(1分間あたり18~20回転)させ、10~15ミクロンほどに粉碎する。泥水を回収して沈殿したものを乾燥させ、袋詰めして出荷する。瑞浪地区では、主に磁器用の原料となる長石質^{ちようせき}の石粉づくりや釉薬の原料づくりが行われ、さらに時間をかけて微細に粉碎していた。今も同市釜戸地区では7,8工場でその生産が続けられている。

■産業遺産として保存されたトロンメル

水車を動力としたトロンメルは、藤岡民俗資料館や瑞浪陶磁資料館に展示されている。当時は1台の水車で、両側に据えたトロンメル2台を回すものが多かったが、展示ではどちらも1台のトロンメルとなっている。



豊田市藤岡民俗資料館に展示のトロンメルと水車
(2004.4 筆者撮影)

トロンメルは製陶工場でも使われていた。その一例が、常滑の「やきもの散歩道」の旧工場を利用した土産物店にある。電動機を動力とした時代のトロンメルが、かつての姿をそのままに残している。



常滑の旧製陶工場に残る電動機付きのトロンメル
(常滑市栄町、2023.11 筆者撮影)

(天野武弘)